

## 第 12 回生物小委員会における委員意見及び対応（案）

No.	第 12 回 小委資料	委員意見	対応（案）
1	資料 3-1 A1	<p>（岩淵委員）</p> <p>H18 報告以降に発生した二枚貝類に係るイベントは記載すべき。</p> <p>・ A 1 海域：H23 のサルボウ大量へい死については、第 31 回評価委員会で報告されているなど</p>	ご指摘を踏まえ、記載した。
2	資料 3-2 A2	<p>（岩淵委員）</p> <p>タイラギの立ち枯れへい死については、これまで評価委員会でも議論されている。要因が確定していないと報告書には記載しづらいが、推定が含まれる場合であっても考察に入れるべき。</p>	ご指摘を踏まえ、記載した。
3	資料 3-2 A2	<p>（古賀委員）</p> <p>タイラギ立ち枯れへい死について、これまで要因考察した部分は、ここは分からなかった、ここは分かったと区分するなどして報告書に記載すべき。</p>	

No.	第12回 小委資料	委員意見	対応(案)
4	資料3-2 A2	(古賀委員) 図6は、最新のデータまで入れるべき。	調査結果を精査し、今後、最新データを加えた。
5	資料3-2 A2	(古賀委員) 図1、2、14は、似た図が並べられている。整理すべき。	重複した図については、整理した。
6	資料3-4 A4	(平山委員) A4海域において、アサリは長期的トレンドとしては減少している。 近年では、ホトトギスガイの大発生、肥満度・浮遊幼生量の低下による減少が見られ、H24には九州北部豪雨による土砂堆積で急激に漁獲量が減少した。 これまで議論された内容は報告書に追加すべき。	ご指摘を踏まえ、記載した。
7	資料3-4 A4	(平山委員) 資源管理に関する記載について、資源管理方法は確かに確立されていない部分があるが、漁業者は独自に漁獲管理量を設定するなど、意識は変わってきている。漁業者の努力が見える形で記載すべき。	4章各海域において、資源管理の内容について記載した。

No.	第12回 小委資料	委員意見	対応(案)
8	資料3-6 A6	(古賀委員) A6海域のタイラギの漁獲データについて記載すべき。	タイラギについては、海域ごとに漁獲量を整理することが困難であり、参考資料2(参考データ)に有明海全体の漁獲量として示しているところ。
9	資料3-6 A6	(藤井委員) シャットネラ赤潮がアサリ減少の要因とは考えにくいと記載されているが、赤潮発生による貧酸素水塊発生によりアサリがへい死したという事例はある。	ご指摘の箇所は、シャットネラ赤潮が直接アサリに有害作用をあまり示さないという知見について記載したものの。
10	資料3-8 有明海全体	(伊藤委員) 浮遊幼生調査結果から、A4が母貝のソースとなっていると言えるのか。	A4海域で確認されているタイラギ浮遊幼生については、日令2~4日程度のものが主体であるため、この海域に親貝資源が一定量存在することが推定される。
11	資料4-1 Y2	(佐々木委員) ホトトギスガイの「繁茂」との表記は一般的ではないため修正すべき	「大量発生」に修正する。
12	資料4-2 八代海全体	(平山委員) 現在の海域区分では、養殖の量が出せないが、海域区分を変更することはできないのか。	養殖魚類のへい死の要因は赤潮で共通していることから、八代海全体の項で記載することが適当であると考えられる。

第12回生物小委 委員意見及び対応(案)

No.	第12回 小委資料	委員意見	対応(案)
13	資料4-2 八代海全体	(佐々木委員) P.10 2009年の赤潮は 型だけでなく 型もあった。P.6 でみても赤潮発生のパターンは2つある。断定的に書きすぎている感じがする。	型の誤りであったため、訂正する。 (原著論文では、シミュレーション結果と一致することを根拠に、 型であると推定されている。)
14	資料4-2 八代海全体	(山本委員) P.6 ヒラメの赤潮に対する耐性については、被害が出ていないからなのか、実験等での結果からなのか。	当該部分の記載内容を削る。
15	資料4-2 八代海全体	(平山委員) ヒラメについては、海面ではなく、陸上養殖の携帯である。	